

子どもの本

研究会



32周年

【私の一冊】

『太陽の子』

灰谷 健次郎 著 (角川文庫)

遠藤 洋路

中学生になったばかりの頃、初めて買った文庫本である。当時は新潮文庫だった。明るいタイトルに惹かれて選んだのに、読んでみると決して明るいだけの話ではなかった。このタイトルから、誰が沖繩と戦争の話を想像するだろうか。

主人公のふうちゃんは、神戸の下町で暮らす女の子。両親が営む琉球料理店に集う仲間たちは、それぞれが戦争や差別にまつわる過酷な体験を秘めている。ふうちゃんのお父さんもまた、戦争の後遺症から精神を病んでしまう。しかし、苦しさや悔しさにまみれた経験をした人ほど、なぜかとても優しいのだ。

私は物語の迫力に圧倒され、引き込まれるように読んだ。何度も心を揺さぶられ、涙した。クライマックスの一行を読んだ時のショックは、今でも脳裏に焼き付いている。

大人になって読むと、教師出身の灰谷らしく、いかにも学校の先生が好きそうなクサイ話である。後半になるにつれ、大事な部分を手紙形式に委ねてしまうのは、小説として物足りない。作品以前に、新潮社と絶縁して版權を角川に移すなど、全くもって大人げない。など、言いたいことは多々出てくるが、この作品の魅力は、そんなことでは揺るがない。

亡くなってからももうすぐ十年。灰谷の名前を聞くことも少なくなった。しかし「太陽の子」は、沖繩と本土との関係が問い直される今、改めて読まれるべき作品である。この忘れられかけた作家が、限界まで苦しんで絞り出した、不朽の名作といえる。

かつて「太陽の子」に夢中になった私は、大人になって灰谷とは対極の人生を歩んでいる。教師を管理する役所に入り、灰谷が嫌った政党に投票し、辺野古に基地を造ることに、集团的自衛権にも賛成である。

しかし、本棚には今も「太陽の子」が入っている。本を手にとればいつでも、あの日の少年に戻るのだ。中学生の私に、「君は三十年後に『太陽の子』の読書感想文を書くんだよ」と伝えたら、何と言うだろうか。

(青山社中株式会社共同代表、元熊本県社会教育課長)